事業名　青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業
～健やかな食を自分でデザインしよう～

南多摩保健医療圏

実施年度	開始　　平成１８年度、　　　終了　平成２０年度
背　　景	南多摩保健医療圏には大学、専門学校等が約 70 校あり、地域特性の一つとなっている。青年期は、この時期から単身生活を始めるなど、生活環境に大きな変化があり、食生活では、欠食、やせ願望、肥満、食生活の技術・知識不足などの問題が指摘されている。この世代は健康不安が少なく、健康への関心が低い傾向にあるが、生活習慣病の一次予防に有効な世代であり、次世代を生み育てる世代としての影響力も大きい。そのため本事業では、生涯を通じて健やかな食生活を送るためには、青年期へのアプローチやその環境づくりが重要であると考え、取組を行った。
目　　標	計画全体の目標 １　調査・モニタリング方法の検討 ２　青年が“自分の食生活をデザインできる力”を身につけられる環境づくり ３　食提供者や大学との連携・協働による青年の食生活をサポートする環境づくり
事業内容	実態把握　平成１８年度～１９年度 １　グループディスカッション等の実施（対象：学生） ２　「青年期の食行動等に関する調査」（対象：学生）の実施 ３　「学生の食環境に関するｱﾝｹｰﾄ」（対象：大学等の施設管理者、学生食堂事業者）の実施 普及啓発方法・サポート体制の検討　平成１８年度～１９年度 １　モデル大学の選定と事業説明・協力依頼 ２　青年期の健やかな食生活支援検討会議の開催（対象：大学、学生食堂、コンビニ等） ３　「青年期の食行動等に関する調査」結果のパネル作成と掲示 ４　食事写真、レシピの募集 ５　学生の応募作品を活用した普及啓発媒体（ﾚｼﾋﾟ、ﾎﾟｽﾀｰ）の作成と配布・掲示 ６　学生による栄養メモ等媒体の作成、食生活改善普及啓発活動の試行 食生活支援の環境づくり　平成２０年度 １　大学での普及啓発活動の実施（レシピ配布、DVD 放映、食事バランスガイド表示等） ２　他大学等への発信（ウェブサイトの設置、媒体集（CD）の作成配布、エプロンの配布） ３　青年期の食生活支援フォーラムの開催
評　　価	目標１：「青年期の食行動等に関する調査」「学生の食環境に関するｱﾝｹｰﾄ」を実施していく中で、調査項目の検討とあわせて、モニタリングに必要な項目等についても検討することができた。 目標２：大学の学生に向けて普及啓発活動を行い「学生の食生活を応援」サイトを設置し情報を提供することで、食関連情報に触れる機会を増やした。 目標３：青年期の健やかな食生活支援検討会議を開催し、青年期の食環境の充実に向けて関係者の協力を確認できた。栄養・食生活ﾈｯﾄﾜｰｸ会議の中で、青年期への食生活支援について検討を行い、当事業の取組内容等を周知することで、地域と共通理解を進めた。大学の施設管理者と連携して学園祭等で普及啓発活動を行うことにより、“青年の食生活をｻﾎﾟｰﾄする環境づくり”を進めた。 本事業の実施により、食の提供者等は青年期への食生活支援の必要性を認識しているが、取組の優先度は低い現状を把握できた。それは、青年が頻繁に利用するコンビニでの普及啓発が実施には至らなかったこと等からもいえる。今後は、大学等施設や事業者が自主的で継続的な取組を実施できるよう支援し、意識の醸成を図ることが不可欠である。
問い合わせ先	南多摩保健所　生活環境安全課　保健栄養係 電　　話　042－371－7661 ファクシミリ　042－375－6697 E-mail　S0200162@section.metro.tokyo.jp

事業報告書から抜粋（P19）

（２）学生食堂向け媒体の作成

管理栄養士専攻学生の公衆栄養学実習の講義において、本事業の目標とする「青年期の健やかな食生活」をテーマに作成された媒体類を電子化し、南多摩保健所のウェブサイト内からダウンロードして学生食堂等で掲示するなどの活用ができるようにした。

南多摩保健所ウェブサイト内

卓上メモ(一部)　資料編、CD に収録

卓上メモ展示例

（３）普及啓発ポスターの作成

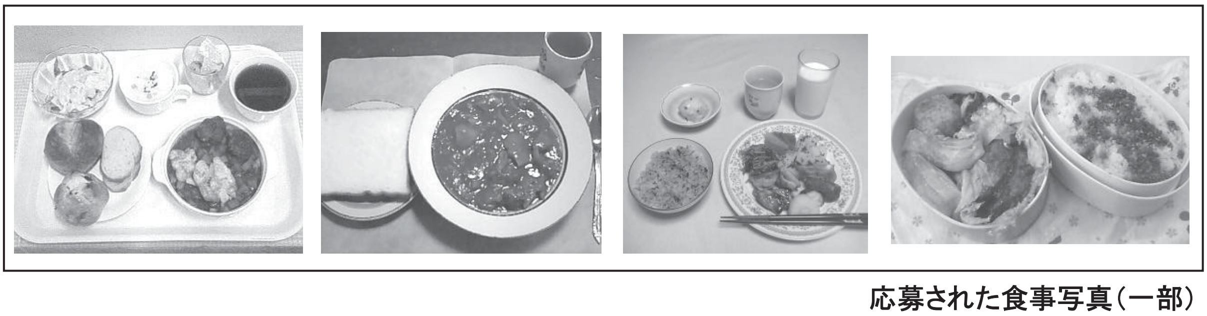
３年目に計画している普及啓発活動として新入生が入る春の時期に圏域内全ての大学、専門学校で使用することを想定して準備を始めた。ポスターを作成する段階でも学生が自分たちの食を考える機会となるよう、学生との協働により作成したいと考え、食事写真の募集及び学生によるデザインコンペを実施し、ポスターを作成した。

○食事写真の募集

大学生のほとんどが持っている携帯電話から応募できるように、ＱＲコードをのせたポスター及びちらしを作成し、食事写真を募集した。また、当事業で行った調査結果（男子大学生の４人に１人は１日１食以上欠食している）を記述し、自分の食生活を振り返るために応募するように、という呼びかけも加えた。

食事写真の募集ちらし(表・裏)

募集期間：平成 19 年9月 20 日から 10 月 31 日
参加賞：食事バランスガイドクリアファイル
ポスター・ちらし配布先：７校（調査協力大学他、他の事業で連携等している大学、専門学校等）
応募数：２２枚（２２名）



応募された食事写真(一部)

青年期の食行動等に関する調査結果のパネル

事業報告書から抜粋（資料編）

特報

大学生の食行動等に関する調査結果のお知らせ

調査概要

南多摩保健医療圏では、平成18年度から「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」に取り組み始めました。

青年期は、次世代を生み育てる重要な役割を目前に控えた世代として、青年自身が自主的に健康的な食生活をデザインできる力の獲得が必要であると考えたからです。

昨年秋、こちらの大学を含む地域の3大学の御協力をいただき、大学生を対象に、「青年期の食行動等に関する調査」を行いましたので、調査結果の概要をお知らせします。

「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」ではこの調査結果をもとに青年期の食行動変容のためのアプローチ方法や食生活の支援体制整備に向けて検討を行なっていく予定です。

調査目的 青年期は、生活習慣病の一次予防に有効な世代であることから、本調査は大学生を対象に、食生活の背景を探り、健康づくりを推進する施策を検討するための基礎資料とすることを目的とする。

調査対象 南多摩保健医療圏（日野市、多摩市、稲城市、八王子市、町田市）内の大学3校の学生
全数 860名 男性294名、女性 566名

調査時期 平成18年11月中旬から12月上旬

調査方法
①調査用紙は、調査目的を記した依頼文と調査票とし、各大学の協力を得て授業中の在籍者に配布し、記入後その場で回収した。
②調査用紙の記入は無記名自記式とした。
③集計については、南多摩保健所生活環境安全課で行なった。

調査内容
①回答者の属性
②食生活等の状況
　ア 食行動に関すること
　イ 食の知識・技術に関すること
　ウ 健康状態・生活習慣等に関すること
　エ 自律度に関すること
③食行動に影響を与えている要因
④食に対する意識と食生活改善のために望むこと

回収率及び有効回答数 回収率 74．3%　有効回答数 632

「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」
～健やかな食を自分でデザインしよう～
東京都南多摩保健医療圏域（南多摩保健所・町田保健所・八王子市保健所）

男子学生の4人に1人が毎日1食以上欠食している

1日3回食べてる？

欠食は栄養バランスを崩すだけではなく、体調のリズムにも大きく影響します。
若い時の欠食習慣がその先の年代の生活習慣に続くという報告もあります。
何か少しでも口にすることから始めて欠食習慣をなくしていきたいですね。

【欠食〈ケッショク〉】

1日の食事で主食・主菜・副菜を「1日3回揃えている」はわずか4．9%、「特に気にしていない」は36．2%！

おかずだけ？ごはんだけ？

バランスのよい食事の条件として主食（ごはん、パン、麺など）、主菜（肉、魚、卵、豆腐などの豆製品を使ったおかず）、副菜（野菜を使ったおかず）が揃うことがあげられます。
1日の食事でこれが3回揃う人は4．9%とわずかでしたが、特に気にしていない人は36．2%と3人に一人は無関心という結果でした。
あなたの食事はいかがですか？「主食・主菜・副菜」今日の食事からチェックしてみませんか？

【単食〈タンショク〉】

徹底解剖！みんなのごはん事情

男子学生の2割 女子学生の1割が毎日1回以上ひとりで食事している

だれかといっしょに食べてる？

一人で食べている人に欠食や食事のバランスに無関心である人が多いという結果でした。
家族や友人など誰かと一緒に楽しく食べることが、欠食を減らし、バランスの良い食事にする一歩かもしれませんね。

【孤食〈コショク〉】

サプリメントを毎日1回以上使用している人は男性では13.7%、女性では15.0%

えっ？サプリがごはん？

最近ではたくさんの種類のサプリメントが安価にコンビニなどでも手軽に買えるようになりました。
「サプリメントをとっていれば安心！」と思っていませんか？
特定成分を取り出したサプリメントをとるだけで健康を保つことはできません。サプリメントはあくまでも食生活における補助的なものです。
栄養補給は食事が基本であることを忘れないでくださいね。

【錠食〈ジョウショク?〉】

4人中3人は現在の食事に問題があると思っている

今のごはんで大丈夫？

食事の問題点TOP5（複数回答）

男子
- No.1 食事のバランスが悪い（67%）
- No.2 野菜の摂取量が少ない（62%）
- No.3 食事時間が不規則だ（50%）
- No.4 食事を欠食する（46%）
- No.5 好きなものに偏る（44%）

女子
- No.1 食事のバランスが悪い（65%）
- No.2 野菜の摂取量が少ない（54%）
- No.3 食事時間が不規則だ（54%）
- No.4 好きなものに偏る（41%）
- No.5 間食が多い（40%）

【偏食〈ヘンショク〉】

「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」
～健やかな食を自分でデザインしよう～
東京都南多摩保健医療圏域（南多摩保健所・町田保健所・八王子市保健所）

女子学生の半分は自分が太っていると思っている

もっともっとヤセたい？

自分の体格への評価とBMI（Body Mass Index）＝体重(kg)÷身長(m)÷身長(m) を比較するとBMIで肥満と判定された人は2．5%であったのに対して自分の体格を太り気味と回答した人は55．0%もいました。
無理なダイエットから体調を崩すこともあります。
自分の適性体重はどれくらいなのか確認してみましょう！

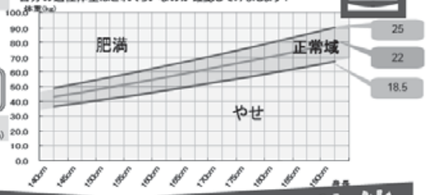
【痩身願望〈ソウシンガンボウ〉】

BMIを使って 太りすぎ やせすぎ をチェック

右のグラフで自分の体重をチェック

BMI（体格指数）の計算方法
BMI＝体重(kg)÷身長(m)÷身長(m)

判定
25以上：肥満
22 ： 標準
18．5以下：やせ



どうなの？みんなの健康状態

半数のふだんの体調は「疲れやすい」

最近、疲れてない？

ふだんの体調TOP5（複数回答）

男子
- No.1 疲れやすい（50%）
- No.2 目覚めが悪い（39%）
- No.3 やる気がない（28%）
- No.4 肌が荒れやすい（22%）
- No.5 イライラする（20%）

女子
- No.1 疲れやすい（53%）
- No.2 肩がこる（45%）
- No.3 目覚めが悪い（40%）
- No.4 肌が荒れやすい（36%）
- No.5 便秘がち（32%）

【疲労困憊〈ヒロウコンパイ〉】

9割の人がストレスを感じている

ストレスけっこうある？

ストレスについては、全体では「時々感じている」が最も多く74%で、「常に感じている」が15%ほど、「感じていない」が11%でした。ストレスのコントロールは難しいですが、うまくつきあっていきたいですね。

【ストレス過剰〈ストレスカジョウ〉】

就寝時間の最多は午前1時から2時

すっきり起きてる？

就寝時刻で最も多かったのは男性で午前2時、女性では午前1時でした。大学生の4人中3人はアルバイトをしているので、就寝時間は遅くなる傾向があるようです。生活スタイルは体調や食生活に大きく影響しています。将来の健康のためにもあなたの生活スタイルについて一度考えてみませんか？
ちなみに平日の起床時間で最も多かったのは男性で午前8時、女性では午前7時でした。

【深夜就寝〈スイミンブソク〉】

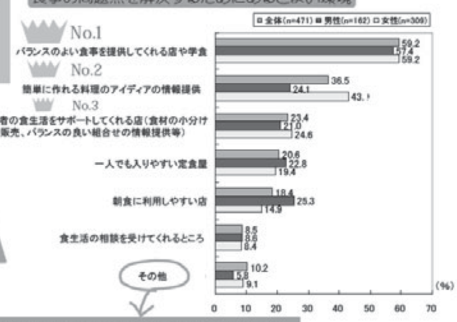
「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」
～健やかな食を自分でデザインしよう～
東京都南多摩保健医療圏域（南多摩保健所・町田保健所・八王子市保健所）

発表！みんなはこれが欲しかった♪

半数がバランスのよい食事の提供店を希望

あったらいいな！

食事の問題点を解決するためにあるとよい環境



その他の意見から▸▸ 単身者の食生活をサポートしてくれ、しかも値段が安い店（男性） 料理講習（男性） 早寝早起きできる環境（女性） ゆとりのある生活（女性） 学校の近くに住む（女性） 食費を国からもらいたい（男性） 朝、起きられる環境（男性） 安くて、おいしくて満腹になって健康な料理を出す学食と飲食店（男性） 強制的に食べさせる環境（男性） 昼休みの時間延長、食堂の席数の増加（女性） 材料を配達してくれる生協みたいなもの（男性） きちんとしたご飯がでるバイト（女性） 安くて美味しいお店（女性） 心がけが大事だからいらない（男性）

多摩最大の大学生向け食事環境改善プロジェクト いよいよはじまる

現在の食事に何らかの問題があるとしている人でも、自分の食事を今後どうしたいかという質問では「今よりよくしたい」と答えた方は約7割と高い数字でした。
南多摩保健医療圏では青年期の健康的な食生活支援のために、青年期に向けた普及啓発活動、体制整備に取り組んでいく予定です。

「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」
～健やかな食を自分でデザインしよう～
東京都南多摩保健医療圏域（南多摩保健所・町田保健所・八王子市保健所）

栄養・食生活ネットワークニュース No7

2008年7月
発　行　栄養・食生活ﾈｯﾄﾜｰｸ会議
事務局　東京都南多摩保健所
多摩市永山 2-1-5
電話 042-371-7661

南多摩保健医療圏
「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」から

「偏ってない？‥‥あなたの食事大丈夫？」 青年期に向けた普及啓発ポスターと一人暮らしの応援レシピ

大学生と一緒に作りました！

南多摩保健医療圏にて平成１８年度から取り組んでいる「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」では青年期に向けた健やかな食生活のための普及啓発活動のツールとしてポスターと一人暮らしの応援レシピを作成しました。

このポスターに使われている食事の写真は実際に大学生から募集をし、ポスターのデザインも東京家政学院大学の加藤友希子さんの作品を採用しました。

一人暮らしの応援レシピは平成１８年度に行なった調査（青年期の食行動等に関する調査）結果から食生活のマイナス要因は一人暮らしの人の方が顕著であったことから、一人暮らしの人の食生活を応援するツールとして作成し、学生から募集したレシピ５点を掲載しています。食事写真やレシピの募集、ポスターデザイン作成に対象世代である大学生が関わることにより自分自身の食生活を見直すきっかけとなること、また同世代が作成に関わったポスターやパンフレットに対する注目度も期待しているところです。ポスターは３月に南多摩保健医療圏域の各大学、短大、専門学校に送付し、学内での掲示を依頼したところです。

大学での普及啓発活動がはじまりました

八王子市にある杏林大学学生食堂において大学及び学生食堂の協力を得て､4月２２日と２４日の２日間、学生を対象に食事バランスガイドの普及啓発を行いました。これは「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」の活動の一つとして行ったものです。学生食堂を利用する学生に「食事バランスガイドを知っていますか？」と認知度の調査を行いながらパンフレット、食事バランスガイドのイラストがついた携帯電話画面クリーナーを配布しました。フリップボードにシールを貼ってもらう回答方法に「テレビみたいですね。」と興味を示した方もあり、認知度調査には２日合わせて３４７名の皆さんが協力してくれました。

学生食堂では上記のポスターと食事バランスガイドのポスターの掲示や、食堂メニューにエネルギー、塩分などの栄養成分表示と食事バランスガイドによる表示を行ないました。杏林大学では「一人暮らしの応援レシピ」を新入生ガイダンスで配布し、健やかな食生活のための普及啓発活動に協力いただいています。

「学生の食生活を応援」コーナーを新設！

４月にリニューアルした南多摩保健所ホームページ内に「学生の食生活を応援」コーナーを新設しました。上記の「青年期の食行動等に関する調査結果」や「一人暮らしの応援レシピ」がダウンロードできるほか､東京家政学院大学と実践女子大学の管理栄養士専攻の学生さんたちが知恵をしぼってつくった卓上メモをベースにした栄養メモなども掲載しています。また、教職員や学生食堂の方向けに印刷・加工して使っていただけるレシピ集（ワード版）などを掲載しています。これらのツールが青年期世代をとりまく環境で広く活用され､青年期の健やかな食生活を支援する体制整備につながることを南多摩保健医療圏では期待しています。

学生の食生活を応援

学生の食生活を応援	検索

ご存知ですか？
毎月１９日は「食育の日」

少なくとも週１回は家族そろって
食卓を囲む機会を！

内閣府選定　平成20年度の食育標語
・うれしいな　笑顔満点　食満点
・食文化　次は　あなたが守る番
・選ぶこと　君の健康　守ること

栄養・食生活ネットワークニュース No8

2009年2月
発　行　栄養・食生活ﾈｯﾄﾜｰｸ会議
事務局　東京都南多摩保健所
多摩市永山2-1-5
電話 042-371-7661

南多摩保健医療圏
「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業」から

「青年期の健やかな食生活支援フォーラム」を開催！

昨年１１月１７日（月）、パルテノン多摩第一会議室において「青年期の健やかな食生活支援フォーラム」を開催いたしました。本フォーラムは「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備」について関係者の方々と一緒に考える場として企画し、当日は大学関係者や食堂事業者、行政栄養士など５２名の参加がありました。

南多摩保健医療圏では地域の関係機関等の御協力を得ながら、平成１８年度から３か年で「青年期の健やかな食生活を支援する体制整備事業～健やかな食を自分でデザインしよう～」に取り組んできました。

今回のフォーラムでは、これまでに保健所が行ってきた事業の取組についての報告と女子栄養大学教授石田裕美先生による基調講演（「学生食堂・従業員食堂のチカラ　～生活習慣病対策・健康づくりのために食堂の持つチカラをどのように生かすか」）そして学生食堂からは大学生活協事業連合の管理栄養士高橋氏、従業員食堂からは株式会社ライフクリエイトの取締役岡氏から１題ずつ事例発表を行いました。

青年期は、健康への関心の低さから食生活が乱れがちである一方、次世代を生み育てる重要な役割を目前に控えた世代です。メタボリックシンドローム対策等の生活習慣病が重視される中で、青年が自主的に健康的な食生活をデザインできる力を獲得することは大変重要です。

今回のフォーラムでは、青年期の食育のアプローチ方法等を関係者が考える研修の機会として、とても有意義な時間を持つことができました。終了後のアンケートでは「講演、事例報告が大変よかった。」「未来を担う若者たちに、どのように食事を選択していったらよいか、『自分の食生活をデザインする』ことの大切さを再認識した。」、また「保健所の青年期の食生活への取組がよくわかった。」、などの声が寄せられました。

本事業は今年度が計画の最終年であり、年度内に３年間のまとめとなる事業報告書を作成していく予定です。

大学祭での普及啓発活動

「みそ汁はどっちに入るの？？」「えー納豆は副菜じゃないの?」「やっぱり刺身は主菜だよね。
これは杏林大学の学園祭で行なわれた「主食・副菜・主菜あてクイズ」での様子です。
青年期世代に向けて食生活の大切さを伝えるために１１／１（土）の杏林大学学園祭にて普及啓発活動を行いました。

今回は、総合政策学部の野山先生に御協力をいただき、野山先生のゼミの学生と協働した取組を行うことができました。
ゼミでは「学生の食生活を考える」をテーマにゼミ生１７名が、３日間写真による食事記録をとり、食事バランスガイドを使って自らの食事を評価し、その要因などを分析して改善策を考えるという内容の発表が行われました。

保健所は各自の食事評価へのアドバイスを行うとともに当日は来場者に向けて体脂肪量や筋肉量、基礎代謝量などが測定できる体組成測定や栄養相談などを行いながら資料や食事バランスガイドグッズの配布を行いました。
体組成測定には約１００名近くの方が測定に訪れ、測定結果の解説には真剣に耳を傾けていました。

また、１１／８（土）には東京家政学院大学の「ＫＶＡ祭」でも同様に体組成測定や資料の配布、資料の展示を行いながら、青年期世代へ向けて普及啓発活動を行いました。

その他の大学等への拡がりとしては食事バランスガイドエプロンを８校の大学・短大・専門学校の学園祭で活用してもらうことにより食事バランスガイドの普及啓発にも御協力をいただきました。

今回の取組が青年期世代の各自の食生活を見直すひとつのきっかけになってくれることを期待します。

<table>
<tr><td colspan="2">事業名　地域全体で考えよう「働き盛りのうつ病対策」～壮年期の自殺を減らそう～）</td></tr>
<tr><td colspan="2">南多摩保健医療圏</td></tr>
<tr><td>実施年度</td><td>開始　平成１９年度、　終了（予定）　平成２１年度</td></tr>
<tr><td>背　景</td><td>日本における自殺者数は平成 10 年に 3 万人を越え、現在まで高い水準が続いている。平成 18 年に制定された「自殺対策基本法」では、関係機関と連携した自殺対策への取組が定められた。南多摩圏域においては、壮年期の自殺割合が高く、その数は交通事故死の約 5 倍にのぼっている。</td></tr>
<tr><td>目　標</td><td>住民・市・医療機関・商工会等関係団体との連携・協働により、働き盛りのうつ病対策、ひいては自殺予防のためのサポート体制を構築する。</td></tr>
<tr><td>事業内容</td><td>〔20 年度〕
(1) 診療ネットワーク構築を目指したかかりつけ医対象の普及啓発活動
①　地区医師会と連携し、研修会を開催
②　ネットワークの構築方法の検討
(2) 労働分野対象の普及啓発活動
①　講演会の開催
②　リーフレットの作成
(3) 関係機関連携会議の開催
(4) 相談体制構築のための社会資源情報の整理

〔21 年度〕
(1) 内科医・精神科医診療ネットワーク構築
(2) 労働分野対象の普及啓発活動
(3) 報告書作成</td></tr>
<tr><td>評　価</td><td>他機関の本事業（連携会議、講演会）への参加状況は、前年度と比較して参加者数が減少した。特に、商工会議所等産業労働部門の参加が減り、中小企業へのアプローチの難しさを感じた。かかりつけ医向け研修は、診療時間などの問題から多くの参加は期待できないが、医師会の協力も得られ、充実した内容の研修が実施できている。
２１年度は、診療ネットワーク構築に向けた具体的な体制づくりのため、関係者で構成する検討会を立ち上げ、さらに診療連携を試行する。かかりつけ医向け研修は、他地区医師会へ対しても実施していく。また、産業労働部門への普及啓発は、労働衛生週間など企業の主体的な取組と合わせて実施するなど、開催時期を検討していく。今後、いかに産業労働分野への動機付けを行い、協働で効果的な取組を進めて行くかが課題。</td></tr>
<tr><td>問い合わせ先</td><td>南多摩保健所　企画調整課　企画調整係
電　話　０４２－３７１－７６６１
ファクシミリ　０４２－３７５－６６９７
E-mail　S0000344@section.metro.tokyo.jp</td></tr>
</table>

平成２０年度課題別地域保健医療推進プラン

地域全体で考えよう「働き盛りのうつ病対策」～壮年期の自殺を減らそう～

２０年度実績

≪普及啓発≫
- ○　多摩市医師会とかかりつけ医対象「うつ病対応力向上研修」開催（１０月１８日/３月１４日）
- ○　関係機関連携会議開催（１０月２日）
  参加機関数：２４機関
- ○　講演会開催：２月１６日

≪サポート体制の構築の検討≫
- ○　社会資源情報整理→リーフレット作成

２１年度計画

≪普及啓発≫
- ○　「うつ病対応力向上研修」開催
- ○　関係機関連携会議の開催
- ○　産業労働分野対象の講演会等開催

≪サポート体制の構築の検討≫
- ○精神科医・かかりつけ医との連携体制の構築

≪まとめ≫
- ○報告書作成

事業目標

- ○　住民・市・医療機関・商工会議所等関係団体との連携・協働により、働き盛りのうつ病対策、ひいては自殺予防のためのサポート体制を構築する。（H１９～H２１）
- ○　うつ病対応力向上研修を対象を拡大し実施する。また、関係機関と協働で住民等への普及啓発活動を実施する。（H２１）

期待できる成果
①内科医のうつ病に対する対応力向上

期待できる成果
②うつ病についての正しい知識の普及によるうつ病の予防及び早期発見

期待できる成果
③関係機関の連携と地域の課題の共有及びサポート体制の構築

事業内容：地域全体で考えよう「働き盛りのうつ病対策」
（平成２１年度）
- ○　診療ネットワークを目指した普及啓発活動を対象を拡大し実施
- ○　労働分野対象の普及啓発活動
- ○　サポート体制の検討

背景と課題

- ○　「自殺対策基本法」の制定によって関係者相互の連携のもとに自殺対策を実施する基本理念と、国、自治体、事業主、国民それぞれの責務が明らかにされた。
- ○　圏域の自殺死亡数が交通事故死の約５倍であり、また壮年期の自殺割合が高い。
- ○　地域の連携、協働を推進し、働き盛りのうつ病対策ひいては自殺予防につながる地域のサポート体制の構築が必要である。

20 年度の取組内容

(1)かかりつけ医向け研修

【うつ病対応力向上研修】

≪実施体制≫
　多摩市医師会との共同開催
≪実施日時≫
　○ 第１回：20 年 10 月 18 日（土）
　　　　　　午後４時から８時まで
　○ 第２回：21 年３月 14 日（土）
　　　　　　午後５時から７時まで
≪対象≫
　多摩市医師会会員・その他関係機関職員

(2)労働分野向け講演会

【会社のうつ】

≪実施体制≫
　関係機関連携会議構成機関との共同開催
≪実施日時≫
　21 年２月 16 日（月）
≪対象≫
　民間企業・行政・その他

普及啓発

(3)関係機関連携会議

≪実施体制≫
　産業労働・医療機関・民間団体・行政・
　学識経験者など 33 機関で構成
≪実施日時≫
　20 年 10 月２日（木）午後２時から４時
≪実施内容≫
○ ミニ講座
　「働き盛りの年代とこころの健康
　　　　　　～男性のうつを中心に～」
○ 前年度活動実績・年間計画について報告
○ 東京都の自殺総合対策について報告

(4)社会資源情報の整理

地域の相談機関など社会資源情報を盛り込んだリーフレットを作成・配布

21 年度計画

- (1)診療ネットワーク検討会
- (2)労働分野対象講演会
- (3)報告書作成

事業名　発達障害児育成支援体制の構築を目指して

南多摩保健医療圏

実施年度	開始　　平成２０年度、　　　終了（予定）　平成２２年度
背　　景	南多摩保健医療圏においては、療育機関などの社会資源が地域に乏しく、各市の母子保健や福祉、教育の現場においても支援者側が対応に苦慮している現状があり、また、平成17年4月には「発達障害者支援法」が施行され、早期発見と早期支援に係る地方公共団体の責務や関係機関の連携、取組を進めることが定められた。
目　　標	1　地域の保健、医療、福祉、教育従事者の発達障害児に対する理解の促進を図る。 2　発達障害児の個々の特性に合った支援が提供できるよう支援手法の開発と支援者のスキルアップを図る。 3　社会資源情報の整理を行い、関係機関への周知及び効果的な活用を促進する。
事業内容	〔20年度〕 状況把握 （１）母子保健、教育、福祉従事者及び関係機関への調査 （２）社会資源情報の整理 〔21年度〕　1　人材育成研修プログラムの検討・試行　2　関係機関会議 〔22年度〕　1　人材育成研修　　2　報告書等の作成
評　　価	保健所管内3市の保健、福祉、教育を対象に調査を実施。調査結果は、回収率約82%で年度内に集計が終了。21年度初めに分析を行う。 人材育成研修については、調査の分析結果をもとによりニーズの高い研修プログラムを作成し21年度にその普及を試みる。22年度は、さらに既存の様々な手法を研修プログラムに導入し、その活用について普及を進める。また、関係機関連携会議は、今後の支援体制構築に向けた課題の認識のために調査結果が共有できる21年度に開催することとした。
問い合わせ先	南多摩保健所　企画調整課　企画調整係 電　　　話　　０４２－３７１－７６６１ ファクシミリ　　０４２－３７５－６６９７ E-mail　　　S0000344@section.metro.tokyo.jp

平成２０年度課題別地域保健医療推進プラン

「発達障害児育成支援体制の構築を目指して」

２０年度実績

≪状況把握≫
保健所管内３市の保健・福祉・教育機関へ調査実施
≪社会資源情報の整理≫
「子どもの療育関係機関相談の手引き」情報更新

２１年度計画

≪人材育成研修≫
○　研修内容の検討と研修の試行
○　関係機関連携会議の開催

【事業目標】
○　地域の保健、医療、福祉、教育従事者の発達障害児に対する理解の促進を図る。
○　発達障害児の個々の特性に合った支援が提供できるよう支援手法の開発と支援者のスキルアップを図る。
○　社会資源の情報の整理を行い、関係機関への周知及び効果的な活用を図る。

期待できる成果
①支援者が抱える問題・課題の明確化

期待できる成果
②発達障害についての正しい知識の普及

期待できる成果
③支援技術の向上に向けた人材育成研修プログラムの組立て

事業内容：発達障害児育成支援体制の構築を目指して
（平成２０年度）
就学前の早期発見、早期対応の支援体制の構築を目指し、以下の事業目標に取り組む。
○　状況把握：各市関係機関（保健、福祉、教育等）への調査
○　社会資源情報の整理
○　人材育成プログラムの検討

背景と課題
○　「発達障害者支援法」の制定による、国及び自治体の責務の明確化と、関係機関相互の連携による取組の推進。
○　発達障害児に関する専門的知識、技術の不足による支援者の不安と苦慮。
○　就学前後の相談支援機関の連携の不足。

発達障害児への支援に関する調査結果概要

１　調査目的

管内における発達障害児に対する個別支援、関係機関との連携支援状況の現状把握および支援者の発達障害児に関する研修受講状況、希望する研修ニーズ調査を行い、その結果を有効な研修プログラム構築の基礎資料とする。

２　調査対象

南多摩保健所管内（日野市、多摩市、稲城市）の保育園、幼稚園、認証保育所、学童クラブ、小学校、各市の関係部署等　合計 235 施設

３　調査方法

郵送によるアンケート調査

４　調査期間

平成 21 年１月５日から１月 21 日まで

５　調査項目

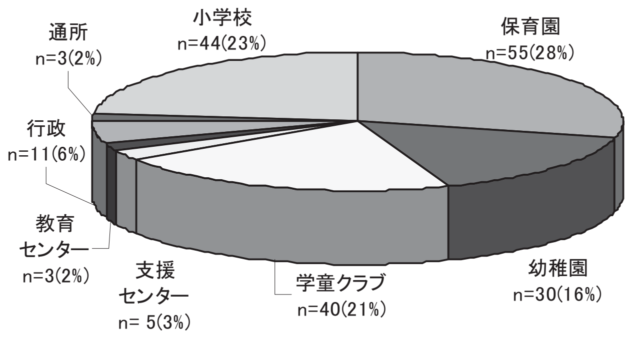
○　発達障害児への支援体制、支援状況
○　発達障害児に関する研修受講状況　等

６　調査結果

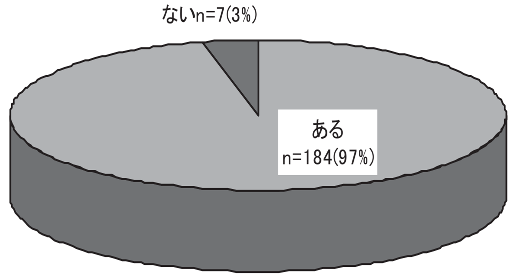
分析対象は、191 施設（調査票回収率　81.3%）

発達障害児に対する支援体制について

施設の内訳



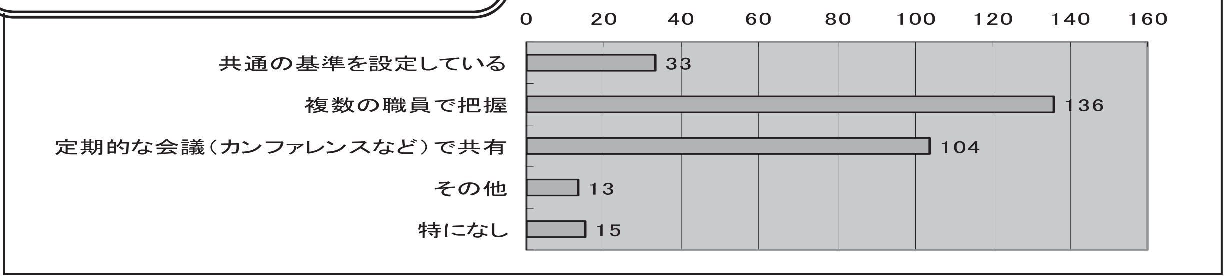
発達障害児への関わりの有無



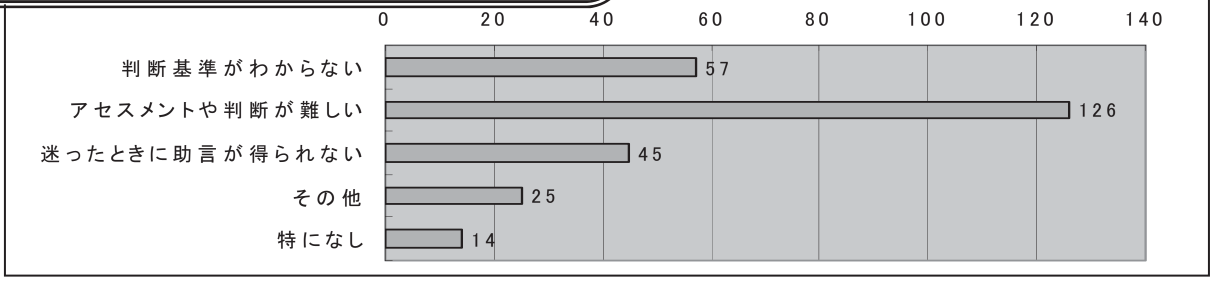
対象施設は、保育園、小学校、学童クラブの順に多く、191 施設のうち 97%が発達障害児（疑い含む）への関わりがある。

発達障害児に対する支援状況について　n=184

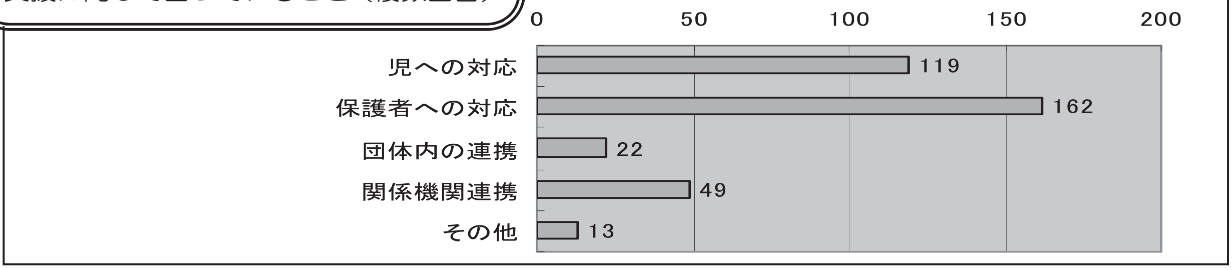
早期発見のための工夫点(複数回答)



早期発見に関して困っていること（複数回答）



支援に関して困っていること（複数回答）

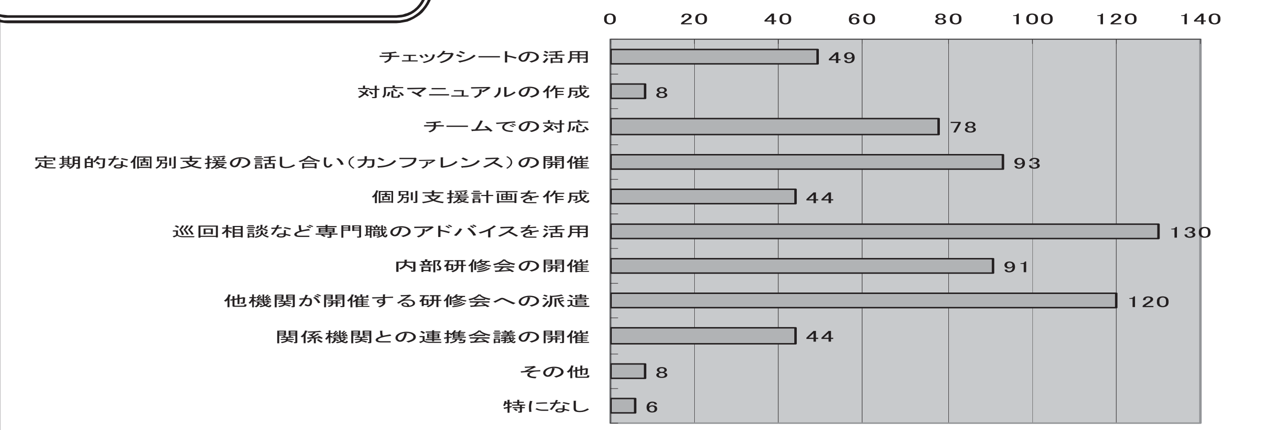


連携に関して困っていること（複数回答）

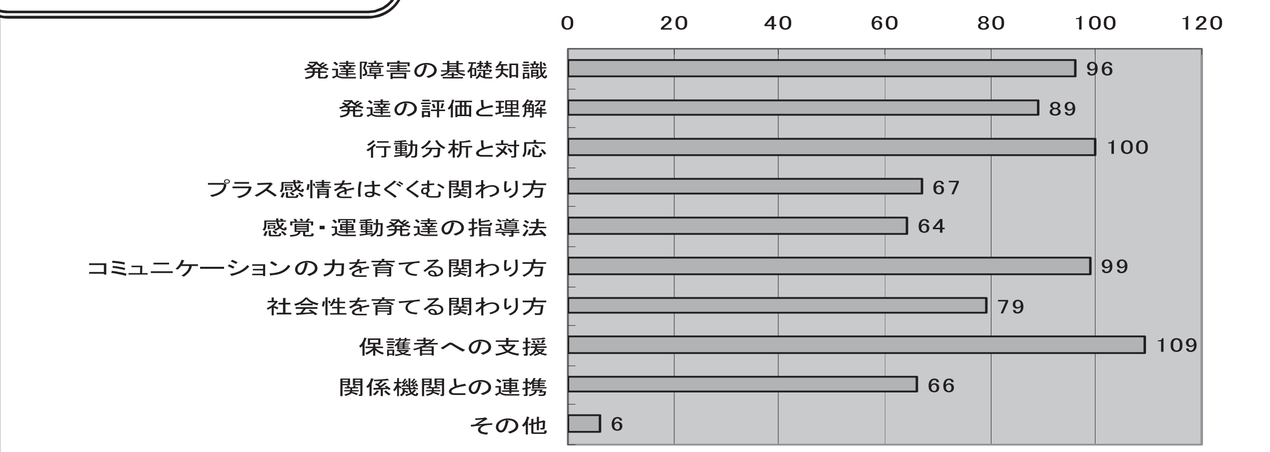
早期発見のために、複数の職員で把握する、定期的な会議で共有するなどの工夫が取られている。
一方で、アセスメントや判断が難しく、迷ったときに助言が得られないなどの困りごとがある。
支援に関することでは、保護者への支援、次いで児への支援で困難さを感じている。
連携に関しては、十分な情報交換ができない、連携先となる機関の情報がないという困りごとがある。

発達障害児に関する研修、人材育成　n=191

適切な対応への取組(複数回答)



希望する研修内容(複数回答)



適切な対応のための取組では、専門職のアドバイスを活用、研修会への職員の派遣などの回答が多く、職員の資質向上のため、より専門的な知識を習得する機会が求められていることがわかった。希望する研修内容では、保護者への支援、行動分析と対応、コミュニケーション力を育てる関わり方が多くなっている。早期発見や支援について困っていることがある機関でみても、希望する研修は同様の結果になっている。